

# 国際

# こだいら



2006年  
No.50

## Kodaira International Friendship Association News

**第50記念号！**



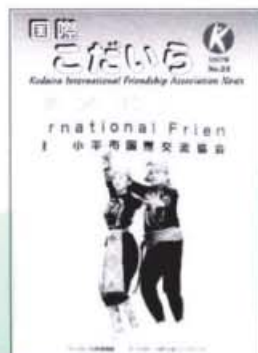
国際交流協会だより  
第1号  
(平成3年5月発行)



協会シンボルマークを伝える  
第5号  
(平成4年7月発行)



国際交流施設オープンを伝える  
第16号  
(平成7年5月発行)



国際交流フェスティバルの  
模様を伝える  
第23号  
(平成9年12月発行)



「国際こだいら」へ名称変更  
第19号  
(平成8年7月発行)



設立10周年記念号  
第33号  
(平成13年4月発行)



文化交流を伝える  
第41号  
(平成15年12月発行)



機関紙誕生から13年  
第50号！  
(平成18年12月発行)

# 外国人の ための 茶道入門

9月21日から11月30日の毎週木曜日（除祝日）午後1時30分～3時30分まで外国人のための茶道教室が行われました。生徒は7人。来日して日の浅い人から10年以上の人までまちまちです。授業は本格的で、ただ単にお茶を点てて飲んでみるという体験教室ではなく、10回の授業で少しずつ基礎を習っていくというもの。きちんと教えた方が覚えが良くなるし、あとあとまで覚えていられるというのが先生方のお考えです。



取材に伺った日は授業2回目。ふくささばきの稽古でした。お辞儀の仕方、歩き方などを復習した後、いよいよふくさのさばき方を教わります。皆懸命に先生を真似ますが、なかなか上手には出来ません。茶道は見て習う。そして何度も稽古を繰り返して覚えるもの。作法は和装で行った時に、一番無駄のない動きなので、どうしても洋装では覚えづらい点もあるようです。

半ばには小休止が入ります。実は生徒さん達にとって一番の至難の業は長時間の正座なのだとか。皆この日本の習慣には悩まされているようです。しばし足の痺れを癒しています。

気を引き締めて後半。先生のお点前を拝見して、お茶を頂きます。今日の菓子、花、掛物の意味を教わり茶室とはその季節、その日を一番感じられるようにしつらえてあると知ります。「これが招いた側の心配りです。だから茶室では目

と心を働かせて下さい。この時間、この空間、この出会いは今一度きりしかない貴重なもの、まさに一期一会なのだということをいつも感じて欲しいのです。」というお話に、一同なるほどと納得です。

授業後、感想を聞くと「以前に抹茶を飲んでおいしいと思い、習ってみたかった。」「いつか着物を着て点ててみたい。」「家でも畳の縁を踏まなくなった。」「背筋がピンと伸びます。」「贅沢な時間ですね。」という声。皆さん、日本人以上に和の心を理解されているようです。

先生方からは「茶道で一番大切なのは技では



なく心。だから多少作法を間違えてしまっても気にしなくてよいのです。思いやりの気持ちや心配りを持って、平常心でその場に臨むことを一番に学んで欲しい。」というお言葉がありました。



# 中国茶入門

9月30日(土)から全10回の予定で、毎週土曜日の午後、学園西町地域センターにおいて中国茶入門講座が開かれています。講師は、台湾出身の木村秋美先生。毎回先生こだわりの、台湾から取り寄せた無農薬でおいしい中国茶を頂き、効能、淹れ方のポイント等を学んでいます。

取材当日は、第2回目で、台湾を代表する香りと言われている

凍頂烏龍茶(ドンディンウーロン茶)と、お湯の中で、固形状になっている茶葉の中から美しい花が咲く工芸茶の2種類のお茶が紹介されました。

先ず、凍頂烏龍茶を淹れました。中国茶は茶葉によって、湯温や蒸らし時間が微妙に異なり、また、小ぶりで繊細な茶器や高温の湯を扱う緊張感もあって全員真剣そのものです。



ですが、淹れ立てのお茶を頂くと「ほーっと」ため息が漏れるほどのよい香りに、そこかしこで大満足の笑みがこぼれました。

次に、「歩歩高昇」(ブーブーカオスン)という名前のおめでたい工芸茶を頂きました。ガラスの茶杯に入れ、その上から湯を注ぐとしだいに茶葉がほぐれ、黄色い菊の花が湯の中で開く様子を楽しむことができます。おりしも、この日の前の晩は中秋の名月、中秋は台湾では三大節日に数えられる大切な日なので、先生は、このお茶を選ばれたそうです。中秋のお菓子、月餅も合わせて頂き、なごやかな雰囲気の中での散会となりました。

たくさんの種類があり、茶器や淹れ方もさまざまな中国茶の世界。とても奥深い世界ですが、今、忙しい現代人のストレス解消に、そのアロマセラピー効果が注目を集めているそうです。参加者の皆さんもその効果を実感されているのではないでしょう。



## 情報提供コーナー オランダよもやま話

10月21日(土)学園西町地域センター1Fにて、講師にエルメル・フェルトカンブさんを迎えてオランダよもやま話をお聞きしました。「日本では風車・チューリップ・チーズの印象ばかりが強いオランダを今日はもっと知って貰おうと思います。そういう私も日本に来るまでサムライや忍者がまだいると思っていたのですが。」とニッコリ笑い、場を和ませて始まった講演会。オランダの地理・日蘭交流の歴史・使用言語・通貨・王室・食生活…と、とてもわかり易く順を追ってスライド映像を交え丁寧に解説して下さいました。

オランダはとても小さい国で、車で3時間も走れば国中どこへでも行ける程。ひとつも山が無く、平坦な地形の為、自転車人口が非常に多いのだそうです。どこでも自転車専用道路が確保してあり走り易いとおっしゃいます。「日本は自転車はどこを走ったらよいのかよくわからない。」とも。またオランダは教会を中心に円形に広がる街並みが多いのも特徴なのだそうです。自転車と街並み。オランダに行く機会があれば是非注目して欲しい点だということでした。

食生活の要はなんといっても主食のジャガイモ。蒸してグレービーソースをかけるのがポピュラーな食べ方です。



スーパーに行くと、品質・種別がひと目でわかるように色分けされた10kg袋が何種類も並んでいます。まるで日本の米のようです。この中からそれぞれが好みのタイプを選ぶのだそうです。朝・昼食は大体が黒パンにチーズを挟んだもの。このゴータチーズもやはりオランダ人にとって“なくてはならない存在”のようです。

そして最後は現在のオランダが抱える深刻な移民問題についても話が及びました。かつては国際交流の先駆者として、友好的に周囲と付き合い合うことで栄えてきたオランダであり、その誉め言葉として「寛容なオランダ人」と言われていたのが、近頃では悲しいことにそうでもなくなってきているのだとフェルトカンブさんには感じられるのです。「移民も2世、3世となり、彼らはオランダで生まれ育っている。やはり差別や偏見があってはならない。それにはお互いの宗教、文化や習慣の違いを理解し、認め合うことが大切になっているのだと思います。」とおっしゃっていました。お互いをよく知り、認め合うことが、世界中の戦争をはじめとする争いごとを無くしていくことに繋がる

第一歩だと考えるフェルトカンブさん。とても温かな眼差しで穏やかに語りかけるお話に、会場全体が真剣に聞き入っていました。聴講者からは熱心な質問が次々と投げ掛けられ、皆がオランダという国に親しみを覚えたお話し会となりました。





イランはカスピ海とペルシャ湾に挟まれ、国境をイラク、トルコ、アゼルバイジャン、アルメニア、トルクメニスタン、アフガニスタン、パキスタンの七ヶ国と接しています。



2002年に来日 現在は電気通信大学で電子工学を学ぶアリヤファル・ザラさんに伺いました。

◎出身はどこですか？

マシャドです。首都のテヘランに次ぐ、イラン第二の都市です。

◎なぜ日本に来たのですか？

イランの留学試験に合格して日本に来ることになりました。叔母が大阪大学に留学していたことがあり、日本には以前から憧れがありました。

◎日本の印象は？

日本人は優しいです。相手を尊敬しています。

◎日本に来て驚いたことは？

何もかもサイズが小さいことです。家、部屋、家具、それに洋服も小さいです。

◎イランの人はどのような服装をしていますか？

日本と同じです。洋服を着ています。但し、女性は外に出る時にはスカーフをかぶります。髪の毛をかくすためです。顔はかくしません。子供はかぶらなくてもいいです。

◎イランの気候は？

夏は暑くて、冬は寒いです。冬は雪が積もってスキーができます。

◎イランの主食は何ですか？

お米です。その他、豆も食べます。シチューや、ケバブーという串焼きをよく食べています。朝食はパンに紅茶が一般的です。イランではコーヒーより紅茶がよく飲まれています。

◎イランの学校制度は？

小学校5年、中学校3年、高校4年で、そのあと、大学へ行きます。

◎趣味は何ですか？

旅行です。九州、新潟、長野、広島などに行きました。もっといろいろな所北海道・京都などへ行ってみたいです。海外では、マレーシア・韓国などに行きました。

◎日本語が上手ですね？

日本語は、日本に来てから勉強しました。最初の3年間はホームステイをして鹿児島高専に通っていました。そこで日本語を実際に使い学んだのです。家族や学校での会話はよくわかりましたが、田舎のお年寄りの言葉は難しいです。よくわかりませんでした。

◎イランに帰ったら何をしたいですか？

今勉強していることを生かしてロボット関係の仕事に就き、国の産業の発展に役立ちたいです。

10月14日(土) 国際こどもクラブにて、ブラジル出身の松本ポリアーナさんによる異文化理解講座が行われました。ポリアーナさんは、日本人のご主人と結婚後来日、小さなお子さんをお持ちのお母様です。



当日は4年生から6年生までの小学生15人が参加、先ず前半で、ブラジルの国について学習、後半で、工作やゲームを楽しみました。

前半の学習では、先ず世界地図でブラジルの場所を確認、

テンポよく、人口は約1億7千万人、国土の面積は日本の23倍、言語はポルトガル語と確認して行きます。次に、実物大のブラジル国旗を示し、「緑はアマゾンの森、青は海、黄は金星は州です。」と分かりやすく説明して下さいました。子ども達はブラジルが、ちょうど地球の反対側に位置し、時差が12時間で昼夜がまったく逆であることに驚いていました。

後半はサンバカーニバルで使う、仮面作りとゲームをしました。ポリアーナさんが切り抜いて作った色とりどりの仮面に、ラメやビーズを貼り付けたり、色を塗ったりして、自分だけの仮面を作るというもの。子供達の自由な感性を刺激して、それぞれ個性的で素敵な作品が仕上がりました。みな、時間を忘れ、熱中していました。最後にゲームをしました。「2人組みになって、額にボール(ブラジルではオレンジ)を挟み、一曲の間ダンスし続けることができれば勝ち」というものです。なかなか難しく、笑い転げてしまってゲームにならないチームもありました。



楽しい時間はあっという間に過ぎ、お別れの時間になりました。最後にポルトガル語で、男の子は「オブリガード(ありがとう)、チャオ(さようなら)」、女の子は「オブリガード、チャオ」と言って別れました。



編集後記

記念すべき第50号を無事発行できました！第34号から編集に携わってききましたが、今号で卒業します。取材を通じていろいろな国の方とお話しする機会が持て、とてもよい経験になりました。気持ちよく取材に応じてくださった方々、ありがとうございました。皆様これからも機関紙〈国際こだいら〉を見守ってください。(H.S)

発行日 平成18年12月1日

発行 小平市国際交流協会 編集 機関紙グループ

小平市学園西町2-12-22 学園西町地域センター3階  
〒187-0045 ☎042-342-4488/FAX.042-347-3003